國學院大學学術情報リポジトリ

Man'yoshu and Ancient Japan's Mainland Immigrants : About the Concept of "East Asia Contact People"

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Wang, Kai
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000051

『万葉集』と日本古代大陸移民
—「東亜交往民」の概念提起について—

王　凱

一、はじめに

『古事記』という書物は、「神の御典」として「よく明らむる」べき最初の書物であり、[1]日本近代国民国家の成立過程においては、「民族の古典」として、日本人のナショナル・アイデンティティを支える極めて有効な文化装置であった。[2]『古事記』と並んで『万葉集』も「純」日本的ものと考えられ、日本人のこころの故郷であると言われることもよくあるが、その日本現存最古の歌集の実質は極めて国際色豊かな典籍であることは既に周知の事実であろう。

とりわけ、『万葉集』の内容や形式などの面において、中国の文学と文化の影響を強く受けていることは言うまでもなく、[3]集中の豊富多彩な歌人構成の面においても、その特徴がよく現れている。[4]それらの万葉歌人の氏族出自によれば、大方「日本在来氏族」と「非日本在来氏族」の二つのグループに分けることができるが、後者、日本において称される、所謂「帰化人」や「渡来人」、そして中国で称される「日本古代大陸移民」と呼ばれる集団については、両国間の交流の問題として注目される。それらの術語表現や概念を検討する余地はなお残るもの

の、拙稿では便宜上、「（日本古代）大陸移民」、特に『万葉集』を考えた場合、「移民氏族歌人」の表現を使うこととする。

さて、『万葉集』にはいったい何人の古代大陸移民が存在するのであろうか。筆者が統計したところによれば、集中に歌を残した移民氏族歌人は五二名（表一）、作歌のない者は七名である（表二）。その上、移民系であるかどうか説の定まらない歌人四名（山上憶良、縁達師、長忌寸意吉麻呂、長忌寸娘）を加算すると、[5] 合計六三名になる。人数と作歌数を合わせて考えると、やはり看過できない歌人集団である。それだけでなく、彼ら移民氏族歌人は万葉歌の生誕そのものと深く関わっており、万葉集の歌風の進化においても、その果たされた役割も大変重要であった。[6]

表一：移民系歌人（歌有り）　52名

出自	人名	人数
中国	薩妙観、雪連宅麻呂、張福子（張禄満）、内蔵忌寸縄麻呂、田辺史眞上、板持連安麻呂、田辺史福麿、坂上忌寸人長、田辺秋庭、羽栗	*10*
百済	調首淡海、葛井連広成、吉田連宜、高丘連河内、大蔵忌寸麿、刑部垂麻呂、葛井連大成、文忌寸馬養、宇努首男人、葛井連諸会、麻田連陽春、馬史国人、生石村主真人、安宿公奈登麿、六鯖（六人部連鯖麻呂）、高氏老（高向村主老）、土理宣令、山口忌寸若麻呂、志氏大道（志紀連大道）、秦忌寸八千島、椎野連長年、大石蓑麿、田部忌寸櫟子、葛井連子老、余明軍、秦許遍麻呂、秦田麿、秦間満、軍王、上古麻呂、舎人吉年、調使首、刑部直千国、刑部直三野、刑部志加麿、刑部虫麿	*36*
新羅	三方沙弥（山田史御方）、山田御母、山田史土麻呂	*3*
高句麗	背奈公行文	*1*
不明	高氏義通、桜作村主益人	*2*

表二：移民系歌人（歌無し）　7名

出自	人名	人数
中国	秦朝元	*1*
百済	吉田連老、秦忌寸石竹	*2*
新羅	理願、山田史君麻呂	*2*
天竺	波羅門	*1*

不明	佐々貴山君	1

拙稿はこれらの移民氏族歌人とその作歌の一部を取り上げて考察するとともに、「帰化人」や「渡来人」、そして「日本古代大陸移民」といった地政的イデオロギーを念頭に作られた術語概念についても再考してみたい。

二、「外国」を行き来する人たち

『万葉集』には都の貴族が地方へ移動したり、防人が東国から太宰府へ移動したりするといった日本列島内の移動だけでなく、さらには「国境」を越え、朝鮮半島や中国の間を行き来する万葉歌人もいる。遣唐使と遣新羅使がそれである。そのような外交使節団において、移民氏族歌人が少なくない。

その代表者の一人が百済系の大陸移民と言われている山上憶良である。[7] 憶良は大宝二年（七〇二年）第七次遣唐使の少録を努めており、

山上臣憶良、大唐に在りし時に、本郷を憶ひて作る歌

いざ子ども　早く日本へ　大伴の　三津の浜松　待ち恋ひぬらむ　（一・六三）[8]

という歌が詠まれている。その帰国は慶雲元（七〇四）年か同四（七〇七）年で、定かではないが、その間、唐で大陸文学に接触し、その影響を強く受けていたことに異論はなかろう。そして、その痕跡はその後の憶良の作歌から見出すことも決して難しくはない。[9] また、上記の歌は日本人が外国で詠んだ最初の歌として記念すべき作品でもある。[10]

日本人が外国で最初に創った文学作品と言えば、和歌と対を成している漢詩の存在を忘れてはならない。同じ遣唐使団にいた大陸移民出自の留学僧・釈弁正が、「五言　在唐憶本郷　一絶」という漢詩を『懐風藻』に残している。

27　五言。在唐憶本郷。一絶。

日辺瞻日本。雲裡望雲端。遠遊労遠国。長恨苦長安。[11]

憶良の63番歌とあまり大差はなく、故郷の日本が恋しい気持ちを表す漢詩である。その釈弁正の伝記が、『懐風藻』に残っている。

弁正法師者。俗姓秦氏。性滑稽。善談論。少年出家。頗洪玄学。大宝年中。遣学唐国。時遇李隆基龍潛之日。以善囲碁屢見賞遇。有子朝慶朝元。法師及慶在唐死。元皈本朝。仕至大夫。天平年中。拜入唐判官。到大唐見天子。天子以其父故特優詔。厚賞賜。還至本朝。尋卒。

これによれば、弁正は移民氏族の秦氏の出自である。秦氏については、『新撰姓氏録』[12]の左京諸藩上秦太公宿祢条に見え、山城国諸藩忌寸条によれば、その出自は中国の秦の時代に遡り、秦始皇帝の三世孫である孝武王の子に当たる功満王が仲哀天皇八年に倭国に行き、その子の融通王（弓月王）が応神天皇十四年に、百廿七県の民を倭国に連れて来たという。そのことを『日本書紀』では、弓月王が倭国に来ようとした時に、新羅に阻まれたというエピソードが記されている。上記の伝承をそのまま史実としては信じ難いが、いずれにせよ、秦氏は中国大陸の出自で、そして朝鮮半島を経て日本列島に来たということには間違いなかろう。

そして、その子孫である弁正が唐で皇太子の李隆基と囲碁を打ち、交誼していたという。その後、弁正自身がその長男である朝慶とともに唐で没し、『万葉集』には登場しないが、次男の朝元が唐で成人になってから、日本に帰った。天平年間、朝元は遣唐使の判官として再び唐へ赴き、唐の皇帝はその父親とのよしみにより厚遇したという。

ところで、「帰国子女」の朝元であるが、彼は歌が苦手であったことが『万葉集』巻十七・三九二六番歌の左注に記されている。

…船王、邑知王、小田王、林王、穂積朝臣老、小田朝臣諸人、小野朝臣綱手、高橋朝臣国足、太朝臣徳太理、高丘連河内、秦忌寸朝元、楢原造東人

右件王卿等、應詔作歌、依次奏之。登時不記、其歌漏失。但秦忌寸朝元者、左大臣橘卿謔云、靡堪賦歌、以麝贖之、因此黙已也。

この折の経緯は以下のようである。天平十八（七四六）年正月に、大雪が降り左大臣橘諸兄をはじめとする官人が内裏に参上し、雪かきをしたことで元正太上天皇が喜んで労を犒うための宴を催し、「汝ら諸王卿たち、聊かにこの雪を賦して、各その歌を奏せよ」という詔を出した。その時、秦朝元も参列していたが、咄嗟のことであったためか、歌が詠めなかった。その

ことを諸兄に「麝香を以てその失態を贖え」と言われたという。朝元は医者であったらしく、おそらく当時中国から輸入していた高価な麝香を所持していたのであろう。[13] 朝元は憶良ほどの歌才がなく、唐での生活も長く、唐では漢詩、漢文で応酬していたかもしれないが、ヤマトウタには疎かったようである。

その傾向は何も朝元に限ったことではなく、技術系移民の多い秦氏[14]は、どうもヤマトウタがあまり得意ではないようである。例えば、越中の国の少目である大陸移民の秦伊美吉石竹は何度も宴会を催しているが、歌は一首も残していない（十八・四〇八六～四〇八八、十八・四一三五、十九・四二二五）。ヤマトウタを詠むということは、技術者出身の移民たちにとっては、難しかったようである。

ところで、遣唐使のほか、同じく外交使節である遣新羅使節団にも移民氏族歌人が多くいる。その歌群が『万葉集』巻十五の前半に集中的に収録されていて、一四五首もの膨大な数に上る。

この天平八（七三六）年の遣新羅使節団には、中国系出自の小判官の大蔵忌寸麿をはじめ、同じ出自系統の持つ田辺秋庭、秦田麿、秦間満、雪連宅麻呂、羽栗がおり、それに加えて百済出自の大石蓑麿と葛井連子老、六鯖（六人部連鯖麻呂）の、合計九人の移民氏族歌人が一行に入っており、その中、羽栗のような唐や新羅に何度も行き来したことのある移民もいる。[15]

遣新羅使の移民氏族歌人の作歌にはそれぞれ特色があり、ヤマトウタに対する習熟度のばらつきはあったが、[16] 下記歌群の雪連宅満の死をめぐる移民氏族歌人の葛井連子老（十五・三六九一～三六九三）と六鯖（十五・三六九四～三六九六）を主体となす挽歌群から見れば、彼らは一行の中の移民氏族集団として一定の結束力を有していたと考えることができる。

壱岐島に至りて、雪連宅満が忽ち鬼病に遭ひて死去せし時に作る歌一首并せて短歌

天皇の　遠の朝廷と　韓国に　渡る我が背は　家人の　斎ひ待たぬか　正身かも　過ちしけむ　秋去らば　帰りまさむと　たらちねの　母に申して　時も過ぎ　月も経ぬれば　今日か来む　明日かも来むと　家人は　待ち恋ふらむに　遠の国　いまだも着かず　大和をも　遠く離りて　岩が根の　荒き島根に　宿りする君　（十五・三六八八）

反歌二首

岩田野に　宿りする君　家人の　いづらと我れを　問はば　いかに言はむ　（十五・三六八九）

世の中は　常かくのみと　別れぬる　君にやもとな　我が恋ひ行かむ　（十五・三六九〇）

右の三首、挽歌

天地と　共にもがもと　思ひつつ　ありけむものを　はしけやし　家を離れて　波の上ゆ　なづさひ来にて　あらたまの　月日も来経ぬ　雁がねも　継ぎて来鳴けば　たらちねの　母も妻らも　朝露に　裳の裾ひづち　夕霧に　衣手濡れて　幸くしも　あるらむごとく　出で見つつ　待つらむものを　世の中の　人の嘆きは　相思はぬ　君にあれやも　秋萩の　散らへる野辺の　初尾花　仮廬に葺きて　雲離れ　遠き国辺の　露霜の　寒き山辺に　宿りせるらむ　（十五・三六九一）

反歌二首

はしけやし　妻も子どもも　高々に　待つらむ君や　島隠れぬる　（十五・三六九二）

もみち葉の　散りなむ山に　宿りぬる　君を待つらむ　人しかなしも　（十五・三六九三）

右の三首、葛井連子老が作る挽歌。

わたつみの　恐き道を　安けくも　なく悩み来て　今だにも　喪なく行かむと　壱岐の海人の　ほつての卜部を　かた焼きて　行かむとするに　夢のごと　道の空路に　別れする君　（十五・三六九四）

反歌二首

昔より　言ひけることの　韓国の　からくもここに　別れするかも（十五・三九六五）新羅へか　家にか帰る　壱岐の島　行かむたどきも　思ひかねつも　（十五・　三六九六）

右の三首、六鯖が作る挽歌。

上記歌群によれば、雪連宅麻呂は壱岐島に至り、「鬼病」によって急死した。その挽歌群の冒頭にある大伴三中作と言われている歌は副使として儀礼的なものだと見なされているが、それに続く葛井連子老と六鯖の挽歌は、移民氏族歌人同士としての連携を強く表すものとして、興味深い。国境を越えながら、移民氏族歌人はヤマトウタで交流し、連帯感を醸し出していたのではなかろうか。

上述した移民氏族歌人は、古代大陸移民全体の一部に過ぎない。国の境を越えながら、移民氏族歌人はヤマトウタを詠んで

いたのである。おそらく、古代中国や朝鮮半島の人々は、彼らを通してヤマトウタを耳にしたことであろう。いわば、移民氏族歌人もその文芸も国境なきものであり、東アジアが共有するものであったと思われる。

三、文学の「壁」を行き来する人たち

日本現存最古の漢詩集『懐風藻』を見ると、『万葉集』の歌人らは詩人へと変身する。いわば、和歌、漢詩、漢文の世界をバリアフリーで自由に行き来する古代大陸移民は少なくない。

『万葉集』と『懐風藻』に同時に名前を残した古代大陸移民は、麻田連陽春、葛井連広成、背奈王行文、山田史三方、吉田連宜、刀利宣令の六名いる。特に、背奈王行文、山田史三方、吉田連宜、刀利宣令が高句麗、新羅、百済朝鮮三国の代表として、長屋王の政治的文学サロンで行われた新羅使餞宴の舞台に登場し、「秋日於長王宅宴新羅客」の詩を詠んでいるのは実に興味深い。

高句麗出自の行文は、『万葉集』では「消奈公行文」と称するのに対し、『懐風藻』では「背奈王行文」と称されている。『続日本紀』[17]の延暦八年（七八九年）冬十月乙酉条の高倉朝臣福信の薨伝によれば、福信が幼い頃、叔父に当たる行文に連れられ、本籍の武蔵国高麗郡から上京した。その肖奴一族の祖は福徳であり、唐が平壌城を攻略した時、倭国に逃亡したという。つまり、福信は福徳の孫に当たる。

行文は養老五年正月には正七位上、明経第二博士、「優遊学業、堪為師範」のため、天皇から恩賜を受けている。その後、神亀四（七二七）年十二月、時に正六位上の行文が従五位下に栄転し、神亀六（七二九）年ごろには「宿儒」の名を上げている。[18]行文は『万葉集』には「謗佞人歌」一首残しており、左注には「博士消奈行文大夫」と記されている。

佞人を謗る歌一首

奈良山の　児手柏の　両面に　かにもかくにも　佞人が伴

（十六・三八三六）

右の歌一首、博士消奈行文大夫作る。

ここにいう「佞人」とは、神亀五（七二八）年に実施した内外階制により、行文の出世コースを阻んだ在来氏族のことであろうか。[19]それに対し、『懐風藻』には背奈王行文は従五位下になっており、大学寮の副官を勤めている。「秋日於長王宅宴新

羅客」と「上巳禊飲応詔」を題に、漢詩二首が詠まれている。前者について、

従五位下大学助背奈王行文二首　〈年六十二〉

○六○　五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。〈賦得風字〉

嘉賓韻小雅。設席嘉大同。鑒流開筆海。攀桂登談叢。

盃酒皆有月。歌声共逐風。何事専対士。幸用李陵弓。

とあり、行文はこの時、すでに「背奈王」に改姓されていることから、天平十九（七四七）年前後の作である可能性が出てくる。本詩はほかの長屋王宴新羅使の漢詩群と類似した発想や表現も見られ、とりわけ最後の二句に注目すべきである。文面通りに理解すれば、「任務を果たした専対士」のように、公務のことを忘れ、李陵のように弓箭を以て愁傷を忘れようという意味である。[20] しかし、李陵弓の故事を念頭に考えてみれば、その置かれた境地が行文の境遇とよく似ており、行文は倭国にいながらも、慰めとなるものがないことを、李陵が匈奴に身を囚われながら、弓箭を以て慰めとすることに喩え、行文にとって漢詩は唯一の慰めになると詠んでいることになる。本詩と「誇佞人歌」は行文が在来氏族によって、出世の道が阻まれた不満と愁傷を表している。日本の生活は高句麗の亡命者にとっては大変つらかったことが窺える。

次の山田史は「史」、「造」、「連」、「宿祢」などの姓の変遷を経ている。『新撰姓氏録』右京諸藩上の記載によれば、山田宿祢は周霊王太子晋の出自となっており、また河内国諸藩の記載によれば、山田宿祢は魏司空王昶の出自だという。そのほかにも、未定雑姓和泉国には、山田造が新羅国天佐疑利命から出ているという。従って、総合的に考えてみれば、山田氏は中国、新羅と深く関係しており、その起源が中国で、新羅を経て日本列島に移住した氏族であると考えられる。

山田史三方は、「御形」や「御方」とも作る。『日本書紀』持統六年（六九二）冬十月、御形は務広肆であった。沙門であった御形は新羅へ留学した経験を有しているが、その時には既に還俗されているのであろう。御方は優れた文章家であり、養老五（七二一）年正月には移民氏族の楽浪河内、刀利宣令及び山上憶良らとともに、東宮に侍す命を受けているだけでなく、同月甲戌条には、前述の背奈公行文と同じ理由で、調忌寸古麻呂らとともに賞賜を受けている。更に、養老六年（七二二年）四月庚寅条によれば、周防国の前任長官である従五位上の山田史御方は「監臨犯盗」をしたが、元正天皇は御方が以前遠く新羅

の国に遊学したこともあり、帰朝後も学生を教授するのに効があったことを考慮し、そのように矜持なく窃盗に加わったことに疑問を呈している。従って「宜加恩寵」して、贓物を追求しないことにした。山田史御方は神亀六（七二九）年頃に、「文雅」の人とされている。[21] 山田史三方は「史」であることから知られるように、漢詩・漢文の素養が高く、『続日本紀』の編集者の一人とも擬せられている。[22]

三方は『万葉集』には以下の歌を残している。

三方沙弥、園臣生羽が女を娶りて、未だ幾の時も経ねば、病に臥して作る歌三首

たけばぬれ　たかねば長き　妹が髪　このころ見ぬに　掻き入れつらむか　　三方沙弥　（二・一二三）

人皆は　今は長しと　たけと言へど　君が見し髪　乱れたりとも　　娘子　（二・一二四）

橘の　影踏む道の　八衢に　物をそ思ふ　妹に逢はずして　　三方沙弥　（二・一二五）

三方沙弥が歌一首

衣手の　別かる今夜ゆ　妹も我も　いたく恋ひむな　逢ふよしをなみ　（四・五〇八）

橘の　本に道踏む　八衢に　物をそ思ふ　人に知らえず　（六・一〇一二）

右の一首、右大弁高橋安麻呂卿語り云はく、故豊島采女が作なり、といふ。ただし、或本に云はく、三方沙弥、妻苑臣に恋ひて作る歌なり、といふ。然らば則ち、豊島采女は当時当所にしてこの歌を口吟へるか。

あしひきの　山道も知らず　白檀の　枝もとををに　雪の降れれば〈或は云ふ、「枝もたわたわ」〉（十・二三一五）

右、柿本朝臣人麻呂が歌集に出でたり。ただし、件の一首　或本に云はく、三方沙弥の作といふ。

これらのヤマトウタで示されているように、三方は和歌がうまいだけでなく、漢詩と漢文も大変得意である。『懐風藻』には、山田史三方の「秋日於長王宅宴新羅客并序」、「七夕」、「三月三日曲水宴」の漢詩三首が残されている。

大学頭従五位下山田史三方三首

○五二　五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。并序。

君王以敬愛之沖衿。広闢琴罇之賞。使人承敦厚之栄命。欣戴鳳鸞之儀。於是琳瑯満目。蘿葵充薜筵。玉俎雕華。列星光於烟幕。珍羞錯味。分綺色於霞帷。羽爵騰飛。混賓主於浮蟻。清談振発。忘貴賤於窓雞。歌台落塵。郢曲与巴音雑響。咲林開靨。珠暉其霞影相依。于時露凝旻序。風転商郊。寒蟬唱而柳葉飄。霜雁度而蘆花落。小山丹桂。流彩別愁之篇。長坂紫蘭。散馥同心之翼。日云暮矣。月将継焉。酔我以五千之文。既舞踏於飽徳之地。博我以三百之什。且狂簡於叙志之場。清写西園之遊。兼陳南浦之送。含毫振藻。式贊高風。云々。

白露縣珠日。黄葉散風朝。対揖三朝使。言尽九秋韶。
牙水含調激。虞葵落扇飄。已謝霊台下。徒欲報瓊瑤。

『続日本紀』が記載した山田史三方の履歴と照合すれば、恐らくこれらの漢詩は和銅三（七一〇）年～養老四（七二〇）年に詠まれたものであろう。三方が周防国守の任を経て、大学寮の長官に任ぜられた間になる。特に、○五二番詩において、三方はまず日本の立場、つまり主人である長屋王の立場に替わり新羅使を「三朝使」と呼び、また双方の交流は礼に基づく「対揖」によって行われ、更にその交流は詩楽、つまり「九秋韶」にあると詠んでいる。そして、詩の末尾において突然立場を変え、新羅留学経験のある移民氏族詩人として新羅使の立場に替わって、「已謝霊台下。徒欲報瓊瑤」と詠み、使人たちの気持ちを伝える。[23] 一首の詩において日本と新羅を代表する態度は双方への配慮を示すものであり、それは移民氏族の身分とその特殊な経験ならではの技である。

万葉歌人の刀利宣令も、百済出自の移民系氏族である。『万葉集』では「土理」、「刀理」とも作る。和銅四（七一一）年三月ごろ、『経国集』に対策文を二篇残しているが、[24] 署名は一文字の「刀」で表している。養老五年（七二一年）正月には、上述の山田史三方、楽浪河内と山上憶良らとともに東宮に侍している。『万葉集』には雑歌二首残している。

土理宣令の歌一首

み吉野の　滝の白波　知らねども　語りし継げば　古思ほゆ（三・一三）

刀理宣令の歌一首

もののふの　磐瀬の社の　ほととぎす　今も鳴かぬか　山

の常蔭に（八・一四七〇）

『懐風藻』では、刀利宣令は正六位上・伊予掾とある。「秋日於長王宅宴新羅客」と「賀五八年」の二首の漢詩を残している。

正六位上刀利宣令二首〈年五十九〉

○六三　五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。〈賦得稀字〉

玉燭調秋序。金風扇月幃。新知未幾日。送別何依依。
山際愁雲断。人前樂緒稀。相顧鳴鹿爵。相送使人帰。

○六四　五言。賀五八年。

縦賞青春日。相期白髪年。清生百萬聖。岳出半千賢。
下宴当時宅。披雲樂広天。茲時盡清素。何用子雲玄。

○六三番詩には、刀利宣令が長屋王主催の新羅使餞宴という国際的詩宴の舞台において、送別の「離愁」という個人的な感情を詠んでいることに注目したい。それはヤマトウタの影響を受けて、漢詩に転用したものと見るべきかもしれない。また、○六四番詩には、長屋王の四十歳を祝う為、楊雄の『太玄経』の典故を引用し、自分自身の「清素」を表明している。移民氏族詩人が自分自身の「清」を詠むことが道教思想の影響によるものであることはともかく、常に政治の潔白を表明することでもあり、在来氏族の「濁」、つまり背奈公行文の言う「佞人」と対照させる狙いもあったように考えられる。

最後に、吉田連宜である。その本姓は「吉」であり、百済系の移民氏族である。『新撰姓氏録』左京皇別吉田連条の記載によれば、崇神天皇の時、任那は自分の所有している土地も民も豊かな三己汶地が、新羅と抗争したため治めることができなかった。従って、その土地を倭国に献上し、倭国の将軍に治めて欲しいと願い出た。それで、天皇が群臣会議を開き、「力過衆人、性亦勇悍」の塩乗津彦命を派遣することにした。当地では長官を意味する「宰」を「吉」と称する習慣があるため、それが塩乗津彦命の後裔の姓となったという。『続日本後紀』承和四（八三七）年六月己未条の記載によれば、塩乗津彦命の第八代子孫の達率尚大吉とその弟の少尚らが旧国を思う心があり、帰国してから医術を「世伝」し、尚且つ「文芸」にも通じていたとされる。また、『石上神宮略抄』に引かれている『田村庄司吉田連系譜』によれば、塩乗津彦命の第二十一代の子孫が山辺郡田村里の川辺に住む吉宜、つまり吉田連宜であるとい

う。[25]

吉田連宜はもともと僧侶であり、名は「恵俊」であった。文武天皇四（七〇〇）年、朝廷がその才能を重んじて、勅によって還俗させ、「宜」という名を与え、務広肆という官位まで授けた。元明天皇和銅七（七一四）年正月、正六位下の吉宜が従五位下に栄昇し、養老五（七二一）年正月には、従五位上になった吉宜が背奈公行文、調忌寸古麻呂、山田史御方らとともに、医術の代表者として賞賜を受けている。神亀元（七二四）年五月、聖武天皇による移民氏族に対する大規模の賜姓において、同族の吉智首とともに「吉田連」の姓を得た。『藤氏家伝』によれば、神亀六（七二九）年ごろ、吉田連宜は「方士」の首位に列している。[26] 天平二（七三〇）年正月、「陰陽、医術及び七曜、頒暦」などが「国家要道」であり、「廃闕」してはならないのであるが、「諸博士」は年を取ったため、今のうちに伝授しないと、「絶業」を致す恐れがあるとして、吉田連宜ら七人に各々弟子をとらせ、学習させるという勅が出されている。そのため、吉田連宜は医術の師となり、三名の学生を教授することになった。

『万葉集』の記載によれば、天平二年（七三〇年）四月、山上憶良がその年の正月に大宰府の帥である大伴旅人の宅で行われた梅花宴の歌群、及び憶良が松浦潟の娘子に贈答した歌を書簡に付して、都にいる吉田連宜のもとへ送った。七月、それに対する返信があった。下記の通りである。

宜啓。伏奉四月六日賜書。跪開封函、拝読芳藻、心神開朗、以懐泰初之月、鄙懐除祛、若披樂広之天。至若羈旅辺城、懐古旧而傷志、年矢不停、憶平生而落涙、但達人安排、君子無悶。伏冀、朝宜懐翟之化、暮存放亀之術、架張趙於百代、追松喬於千齢耳。兼奉垂示、梅苑芳席、群英摛藻、松浦玉潭、仙媛贈答、類杏壇各言之作、疑衡皐税駕之篇。耽読吟諷、戚謝欽怡。宜恋主之誠、誠逾犬馬、仰徳之心、心同葵藿。而碧海分地、白雲隔天。徒積傾延、何慰労緒。孟秋膺節、伏願万祐日新、今因相撲部領使、謹付片紙。宜謹啓、不次。

諸人の梅花の歌に和へ奉る一首

後れ居て　長恋せずは　御園生の　梅の花にも　ならましものを　（五・八六四）

松浦の仙媛の歌に和ふる一首

君を待つ　松浦の浦の　娘子らは　常世の国の　海人娘子かも　（五・八六五）

君を思ふこと未だ尽きず、重ねて題す二首

はろはろに　思ほゆるかも　白雲の　千重に隔てる　筑紫の国は

（五・八六六）

君が行き　日長くなりぬ　奈良道なる　山斎の木立も　神さびにけり

（五・八六七）

天平二年七月十日

ここから、吉田連宜の漢文とヤマトウタの力量の一端を窺うことができる。

天平五（七三三）年十二月、吉田連宜が図書頭に任じられ、四年後の天平九（七三七）年九月には、正五位下になった。一年後、天平十（七三八）年閏七月に、典薬頭に任命されている。『日本文徳天皇実録』嘉祥三年（八五〇年）十一月乙卯条によれば、従四位下治部大輔興世朝臣書主の薨伝によれば、その本姓・吉田連の出自は百済であり、父は内薬正正五位下の古麻呂で、その祖父が正五位上の図書頭兼相模介の吉田連宜であるとある。父と祖父は「侍医」であり、天皇に「累代供奉」してきた。また、吉田連宜が「兼長儒道、門徒有録」であるという。[27]

『懐風藻』には、吉田連宜は正五位下、図書頭とあり、五言律詩「秋日於長王宅宴新羅客」、「従駕吉野宮」の二首の漢詩を残している。

正五位下図書頭吉田連宜二首〈年七十〉

○七九　五言。秋日於長王宅宴新羅客。〈賦得秋字〉

西使言旣日。南登餞送秋。人隨蜀星遠。驂帯断雲浮。

一去殊郷国。万里絶風牛。未尽新知趣。還作飛乖愁。

○八〇　五言。従駕吉野宮。

神居深亦靜。勝地寂復幽。雲巻三舟谷。霞階八石洲。

葉黄初送夏。桂白早迎秋。今日夢淵淵。遺響千年流。

上記二首漢詩と和歌からわかるように、吉田連宜は医学に明るかったのみならず、文章、漢詩、和歌の何れにも優れていた。それはその人生の豊富な経歴から見ても明らかであろう。新羅客接待の場において、宴会の政治性と礼儀性を重視して作られたのが○八○番詩であり、○八一番詩の「夢淵淵」という神仙思想は、彼の交流のあった大伴旅人からの影響を受けたものとも考えられる。[28] とにかく、吉田連宜は和と漢の二つの世界に精通する古代大陸移民であることは間違いない。

以上述べてきたように、ヤマトウタと漢詩、漢文の壁を自由に行き来する移民氏族歌人が『万葉集』と『懐風藻』においてその存在を確認できる。そして、彼らは国や氏族などの隔たりはなく、ヤマトウタと漢詩文という二つの古代東アジアの文学ジャンルを活用し、交流を図っていたことがわかる。

四、権力の「輪」を行き来する人たち

古代日本では、文学の問題は即ち、政治の問題である。それは移民氏族歌人にとって、文学はとりわけ特殊かつ重要な道具であることは言うまでもない。『万葉集』には、在来氏族の間を遊走しつつ、様々な形で在来氏族集団と関わりを持つ移民氏族歌人は少なくない[29]。しかし、王権を不自由なく操れる移民氏族歌人はやはり少なく、特殊である。その代表者が葛井連広成と馬史国人である。彼らは『万葉集』の中の「古歌」を巧みに駆使し、皇権を取り込む。いわば、文学的な道具を使用し、政治的な目的を達成した[30]。

葛井連広成は、古歌創作の文学的風潮を政治的なものに変える代表的な人物である。葛井連は元々「白猪史」と称し、『日本書紀』欽明天皇三十年春正月条によれば、天皇に派遣され、白猪田部の丁籍を検校した百済の移民・王辰尓の甥である胆津がその祖先であるという。養老三（七一九）年、まだ白猪史の旧姓を称していた大外記従六位下の広成が遣新羅使になったことがある。

その功績が認められたためか、翌年養老四（七二〇）年五月、「葛井連」の姓を与えられた。天平三（七三一）年には外従五位下、天平十五（七四三）年三月には新羅使来朝の際、「検校供客之事」を担当した。その後、広成は備後国の守に任ぜられ、官位も天平二十（七四八）年には従五位下からの従五位上に昇進した。同年八月、聖武天皇が「車駕幸散位従五位上葛井連広成之宅」、「延群臣宴飲、日暮留宿」しており、その翌日に広成とその妻に正五位上の官位を与えている。さらに天平勝宝元（七四九）年には、孝謙天皇から少輔に任命されている。

葛井連広成は輝かしい政治業績のみならず、文才も並々ならぬものがあった。まだ白猪史の旧姓を持つ時代に、彼は既に天平三（七三二）年五月八日付で対策文三篇を作り、『経国集』に残している[31]。そこには、既に「葛井連」と改姓したのにも関わらず、署名は「白広成」の旧姓が用いられている。

また、広成は中宮少輔在任中に、『懐風藻』にも漢詩二首残

している。

正五位下中宮少輔葛井連広成二首

一一六　五言。奉和藤太政佳野之作。一首。〈仍用前韻四字〉

物外囂塵遠。山中幽隠親。笛浦棲丹鳳。琴淵躍錦鱗。
月後楓声落。風前松響陳。開仁対山路。猟智賞河津。

一一七　月夜坐河浜。一絶。

雲飛低玉柯。月上動金波。落照曹王苑。流光識女河。

広成の一一六番詩は、不比等の詩に応える形で、「遊吉野」を題材に詠まれており、両者の文学及び政治における交流を表している。特に雄略天皇時代の「猟智賞河津」を用いて[32]、その一族の歴史の古さをアピールしようとする狙いがあったと考えられる。また、一一七番詩は「曹王苑」、つまり曹植の文苑に触れているが、広成自身も諸臣皇子たちを自宅に招き、宴を催したことがある。そのことについて、詳しく後述したい。従って、広成は『藤氏家伝・武智麻呂伝』において、前述の山田史三方らとともに、「文雅の人」として名を連ねていることにも頷ける[33]。

葛井連広成は漢詩・漢文が得意だけでなく、和歌にも精通していた。『万葉集』巻六によれば、天平二（七三〇）年、大宰府帥の大伴旅人が勅使の大伴宿禰道足を饗宴したという。宴も酣の時であろうか、皆が突然に駅使である葛井連広成に作歌を求めた。この移民氏族歌人は慌てることなく、突然の作歌を求められて困惑した気持ちを、すかさず歌に読み込んで返した。恐らく満堂の喝采を博したのであろう。

天平二年庚午、勅して擢駿馬使大伴道足宿禰を遣はす時の歌一首

奥山の　岩に苔生し　恐くも　問ひたまふかも　思ひあへなくに（六・九六二）

右、勅使大伴道足宿禰に帥の家に饗す。この日に、会ひ集ふ衆諸、駅使葛井連広成を相誘ひて、歌詞を作るべし、と言ふ。登時広成声に応へて、即ちこの歌を吟ふ。

ここで注意すべきは、広成の作歌は巻七・一三三四番歌と殆ど変わりがなく、極めて類似していることである。つまり、葛

井連広成は普段より古歌をよく学習しているからこそ、「難」から逃れたのではないかと推測することができよう。

このように、自らの才能と努力によって、葛井連広成は徐々に古歌風潮で頭角を現すようになった。『万葉集』巻六・一〇一一番歌の題詞によれば、天平八（七三六）年十二月、葛井連広成の邸宅で盛大な古歌の宴会が行われていた。正しく「曹王苑」そのものであった。

冬十二月十二日に、歌儛所の諸の王・臣子等、葛井連広成の家に集ひて宴する歌二首

比来、古儛盛りに興り、古歳漸に晩れぬ。理に、共に古情を尽くし、同じく古歌を唱ふべし。故に、この趣に擬して、輙ち古曲二節を献る。風流意気の士、儻にこの集へるが中にあらば、争ひて念を発し、心々に古体に和せよ。

我がやどの　梅咲きたりと　告げ遣らば　来と言ふに似たり　散りぬともよし　（六・一〇一一）

春されば　ををりにをり　うぐひすの　鳴く我が山斎そ　止まず通はせ　（六・一〇一二）

それによると、「歌儛所之諸王臣子」が一堂に会し、「共尽古情、同唱古歌」して、隆盛な場面であったことが想像に難くない。ここでいう「歌儛所」は「難波曲」などの古代歌舞を教授する国家常設機関である。[34] つまり、国家機関の貴族官人たちが広成の館に集まったのである。広成の権威地位を示したものでもあろう。当時の文学・政治分野のエリートである「諸王臣子」たちが出席したこの宴会は、客観的に葛井連広成と日本支配者上層部の人々との接触を強化し、「文を以って友を作る」ことで一定の政治的な目的が達成されたと見ることができよう。それまでに単純な文学的風潮がこれを機に一転して、政治と絡んでゆく。古歌運動の始まりである。

それから十年近くの営みを経て、古歌活用による作歌という文学的新風はより一層に移民氏族歌人に根付いてきたとともに、葛井連広成も徐々に古歌運動のリーダー的存在になった。そして、聖武天皇までも彼の素晴らしい能力に注目するようになった。『続日本紀』聖武天皇天平二十（七四八）年八月己未条によれば、聖武天皇は葛井連広成の邸宅で宴会を催しただけでなく、一泊してから、広成とその妻に官位を与えたことは既に前に触れたとおりである。それほど聖武天皇は広成のことを高く評価していた。

ところが、実はこの成功の裏には葛井連広成の巧妙な政治的

策略があった。聖武天皇がまだ皇太子の時に、彼の歌には既に復古への傾向があったように思われる。巻四・五三〇番歌はそれを物語っている。当時まだ皇太子の聖武天皇が海上女王に贈った歌の 左注には、「擬古之作」としていることから、聖武天皇も「古歌」を作ったことになる。

天皇、海上女王に賜ふ御歌一首　　寧樂宮に即位したまふ天皇なり

赤駒の　越ゆる馬柵の　標結ひし　妹が心は　疑ひもなし

（四・五三〇）

右、今案ふるに、この歌は擬古の作なり。ただし、時の当れるを以て、即ちこの歌を賜ふか。

推測の域を出ないが、葛井連広成は聖武天皇の作歌の特色を知って、計画的に古歌運動を推進し、古歌を利用して聖武天皇に接近したのかもしれない。

この策略が奏功したのはなぜであろうか。それは、聖武天皇の懐古思想との共鳴である。聖武天皇は何度も吉野へ行幸しているが、『万葉集』にもその時に作ったと思われる歌（六・九二〇～九二二）が残っている。古きよき時代へ憧れて、聖武天皇は吉野行幸を繰り返したのであろう。この気持ちが彼の作風にも反映し、上述の「擬古之作」が生まれたとも考えられるのではないか。それから、もう一つ軽視できない要素がある。それは当時の政局の動向である。即位して以来、何度も遷都を繰り返したことからもわかるように、聖武天皇は日本在来氏族の旧勢力の束縛から逃れようと、常に模索していた。[35] また、ちょうどこれも葛井連広成をはじめとする大陸移民氏族の衰退が目増しに深刻な状態になっている時期と重なった。その主要な原因は、両方とも日本在来氏族勢力の急速な膨張にあったと考えられる。このように、聖武天皇と葛井連広成をはじめ、移民氏族は在来氏族の旧勢力の拡張を拘束し、自らの政治的生存空間を確保する問題で、暗黙に政治的な合意が達成された可能性があったと推測される。両者はいとも簡単に意見が一致し、古歌運動という「文学的政治運動」を利用し、各々の政治的目的を実現すべく、利用しあうように至ったと考えられるのである。

その後、葛井連広成のこの戦略は馬史国人らの移民氏族歌人に継承されていくが、これも古歌風潮を政治目的に利用することが、ある程度一部の大陸移民の総意であったことを物語っている。馬史一族の出自については、文忌寸最弟と武生連真象（旧姓：馬史）らが延暦十年（七九一）年に改姓を求める上表

の内容によれば、その遠祖は「漢高帝の後」の「鸞」であり、その後裔の「王狗」が百済に至った。百済久素王の時に、大和朝廷が文人を募集している為、久素王によって王狗の孫にあたる「王仁」が貢がれ、それが文、武生両氏族の祖先になったという。そして、この説はほぼ『古事記』や『日本書紀』に於ける王仁渡来（『古事記』では、和迩吉師という）の記事に符合している。よって、馬史を古代中国から百済を経て日本に行った大陸移民氏族と見てほぼ間違いなかろう。

『万葉集』に記録されているように、天平勝宝八（七五六）年、移民氏族歌人の馬史国人が人世の中で、最も重要な客人を迎えることになった。二月二十四日、聖武太上天皇、孝謙天皇と光明皇太后ら一行が河内国の離宮を行幸し、「経信」（二泊）した後、壬子（二月二十八日）に難波宮にいったん戻り、三月七日に馬史国人の館へ移ったのである。『続日本紀』の関係記事と照合すれば、その前、聖武太上天皇一行が三月一日に堀江へ行き、次の日に河内と攝津両国の田租を免除する詔書も出していることがわかる。そして、馬史国人の邸宅から離れた後の三月十四日に、聖武太上天皇が「聖体不豫」となり、孝謙天皇が勅を発し天下に大赦した。四月十五日、一行は「渋河路」を取り、「智識寺行宮」に戻り、十七日には平城京に帰ったという。そして、翌五月二日に、聖武太上天皇が生涯を閉じることになる。

聖武太上天皇一行の世話をしたことは、馬史国人の人生に大きな転機をもたらした。そもそも馬史国人の初見は正倉院文書によれば、天平十（七三八）年で、東史生の少初位下であった。官位も地位も低かったと言わざるを得ない。天平勝宝八年当時の彼も「散位寮散位」に過ぎず、下位官人そのものであった。しかし、聖武太上天皇一行を接し、「古新未詳」の歌を詠んでからは、彼の政治生涯に劇的な変化が起き、とんとん拍子で出世していった。天平宝字八（七六四）年、馬史国人が藤原仲麻呂の乱で手柄を立てたか、従六位上から外従五位下に昇進した。[36] 孝謙太上天皇が重祚し、称徳天皇になってからも、恩賞を与えられたことがあった。天平神護元（七六五）年十二月には、馬史国人（『続日本紀』には「馬毗登国人」と記す）をはじめ、馬史一族が栄華を極め、武生姓を賜ったことになる。馬史国人の身に起きた変化の発端を天平勝宝八年三月七日の記事に求めても、決して不自然ではない。伎人の馬史国人は、作歌によって老年の聖武太上天皇のご機嫌を取ろうとしたが、生半可な古歌しか詠めなかった。しかし、歌はともあれ、結果的に思惑通りに彼を出世コースへ導いてくれた。

しかし、この古歌運動も時代とともに、いつかは去りし歴史になる日が必ずやってくる。それは宝亀元年（七七〇）年三月の歌垣大会のことである。馬史（武生連）も含む王仁の後裔にあたる大陸移民六氏族[37]「男女二百卅人」が「著青摺細布衣、垂紅長紉、男女相併、分行徐進」して、歌を奉ったという。注意すべきは、『続日本紀』がこの歌垣大会ついて、そのうちの二首を記録したうえ、「毎歌曲折、挙袂為節」と評したが、「其余四首」については、「併是古詩」であった為、「不復煩載」ことにした。聖武天皇の時代と共に、古歌風潮も息を潜めていったのである。

上述したように、葛井連広成が巧妙に聖武天皇を利用し、古歌運動を展開したことも、その後の馬史国人が古新未詳歌を詠んだことも、そして王仁の後裔が古詩を以って古代皇権に忠誠を誓ったことも、大陸移民氏族が使用した文学スタイルは「古歌」であった。それは文芸趣向の問題はともかく、ヤマトウタの古歌には彼ら移民氏族の余りにも多くの過去の栄光と美しい思い出が詰まっているからではなかろうか[38]。そして、それは移民氏族が在来氏族の利益集団の間を遊走する道具として使われていたことと密接に関わっていたことが知られるのである。

五、終わりに——「東亜交往民」の概念提起について

古くから大陸から直接、もしくは朝鮮半島経由で日本列島へと渡って移住した人々がいたことは周知の通りであり、それは即ち、拙稿が「外来氏族出自」と呼ぶ人たちのことである。

この特殊な集団のことを、日本人学者の間では、「帰化人」や「渡来人」と呼んでいる。帰化人とは、『国史大辞典』によれば、「主として古代に海外から渡来してわが国に住みついた者を、その子孫を含めていう語」という定義を下している。しかし、そもそも「帰化」という語の文献初出は中国の『論衡・程材篇』にある「帰化慕義」であり、「義があるから、それに慕って、帰化する」という意味である[39]。その後、「少数民族が中原皇帝の徳化により、従ってくる」という意味に発展していく。「帰化」という言葉として、古代日本にも伝わって、日本最初の史書『日本書紀』に好んで使われていた。それは言うまでもなく、日本律令国家の「中華思想」による産物の証である[40]。そもそも、当時の文献において、「帰化人」という固有名詞はなかった。

「帰化人」という術語の成立は近代、特に第二次世界大戦まで待たなければならない。日本民族の優越性を強調し、侵略を

美化するための道具に過ぎなく、いわば「近代皇国史観による産物」であり、「一種の民族差別」でもあった。[41]

戦争への反省思潮に伴い、戦後の学界では「帰化人」という用語への批判が強まり、それに取って代わる術語「渡来人」が多用されるようになった。そもそも、『日本書紀』における「帰化」の多用に対し、『古事記』や『風土記』などにおいては、「渡来」という言葉が使われていた。「海を渡って来る」という、より客観的な術語であり、本来の表現に近いのであろう。現在、この「渡来人」という術語が日本の歴史学と国文学界ではすっかり定着している。

しかし、中国の学界では状況が異なる。「帰化人」という術語については、先述したように、民族や文化の優劣など、イデオロギーに左右されやすいため、中国人学者の間ではあまり人気がない。また、「渡来人」については、そのまま使用する研究者もいるが、中国にしてみれば、大陸を離れて日本列島へ渡って行く人々のことになるため、「渡来人」ではなく、正確に言えば、「渡去人」と称すべきである。つまり、「渡来人」の概念設定はあくまでも日本を中心としているのである。従って、多くの中国人学者は独自の視点に基づき、「（日本）古代大陸移民」と呼ぶことにしている。[42]

勿論、「大陸」に主眼を置く以上、定義の問題がきれいに解消されたことにはならない。この中国大陸を中心とする定義について、韓国の学者たちが異を唱えることは必定であろう。短絡的に考えれば、朝鮮半島から直接日本列島に渡っていく人々が圧倒的に多かったことから、「日本古代半島移民」という提唱があってもおかしくない。

もはや自国の立場を独善的に固持していては、問題解決にならない。当時東アジア世界における人的交流の実態を即物的に考察してみれば、その特殊集団は利益（交易）や政治権力（外交）、そして文学文化のため、国境、文化、権力など様々な次元を超えて東アジア地域を中心に、往来し、交流する活動を活発に行っていた。そして、こうした東アジア全体の動向は、正しく日本古代史研究及び中日比較文学研究の大家である鈴木靖民や辰巳正明両氏[43]が長年来に提唱されてきた「東アジア観」なくしては、俯瞰できないものである。

従って、拙稿では東アジアを中心とする地域を往来し、交流する人たちのことを「東亜交往民」（東アジア交往民）という新たな概念を提起したい。それもまた、「東アジア観」という研究視野を『万葉集』に投影した場合、自ら辿り着いた結果であると言ってよかろう。

付記1

本稿は筆者が國學院大學文学部辰巳正明教授をはじめとする関係者の方々の御厚意により、二〇一三年度國學院大學大学院短期招聘研究員として、講義講演の内容を整理、加筆したものである。また、原稿を作成するに当たり、辰巳正明教授より多大な御指導賜ったこともここに謹んで記し、衷心よりお礼申し上げる。

付記2

本稿はThe Fundamental Research Funds for the Central Universities（課題番号：NKZXB一二四七）による成果の一部である。

注

（1）本居宣長「玉勝間」。吉川幸次郎、佐竹昭広、日野龍夫校注『日本思想体系四〇　本居宣長』。東京：岩波書店。一九七八年、七〇頁。

（2）品田悦一『萬葉集の発明——国民国家と文化装置としての古典』東京：新曜社、一五頁。

（3）中西進「万葉歌の誕生」『万葉集の比較文学的研究』東京：桜楓社、一九六三年。

（小島憲之「萬葉集と中國文學との交流」『上代日本文學と中国文學中』東京：塙書房、一九六四年等。

（4）梶川信行『万葉集と新羅』東京：翰林書房、二〇〇九年。

（梶川信行「東アジアの中の『万葉集』——旅人周辺の百済系の人々を中心に」『國語と國文學』東京：明治書院、二〇〇九年四月等。

（5）参考：梶川信行「渡来系人物事典」『万葉集と新羅』東京：翰林書房、二〇〇九年、二五一頁。

（6）伊藤博『万葉集の歌人と作品　上　古代和歌史研究三』東京：塙書房、一九七五年、三—四七頁。

（7）中西進「憶良帰化人論」『國學院雑誌』七〇巻一一号、一九六九年一一月（中西進『中西進　万葉論集　第八巻　山上憶良』東京：講談社、一九九六年）

（8）『万葉集』は小島憲之、木下正俊、東野治之　校注・訳『新編日本古典文学全集六—九　万葉集①～④』東京：小学館、一九九四年～一九九六年による。

（9）石観海訳・辰巳正明著『万葉集与中国文学』武漢：武漢出版社、一九九七年四月、二九一—三七二等。

（10）辰巳正明『山上憶良　コレクション日本歌人選〇〇二』東京：笠間書院、二〇一一年六月、二一—三頁。ただし、梶川信行氏の見解によれば、歌に詠まれた風物は日本のものであるため、基本的にはヤマトウタは列島内で披露されるべきで、そこでしか詠み得ないとのことである。（梶川信行『万葉集と新羅』東京：翰林書房、二〇〇九年、九三頁）。

（11）『懐風藻』は辰巳正明『懐風藻全注釈』東京：笠間書院、二〇一二年による。

（12）『新撰姓氏録』は佐伯有清『新撰姓氏録の研究』東京：吉川弘文館、一九六二—二〇〇一年による。

（13）梶川信行「万葉集を読む一一　歌が詠めなかった秦朝元—帰国子女の悲哀？—」『語文』第百三十九輯、二〇一一年、四〇—四八頁。

（14）加藤謙吉『秦氏とその民』東京：白水社、一九九八年。

(15) 王勇「遣唐使と混血児」。王勇・中西進編『中日文化交流史大系　人物巻』浙江：浙江人民出版社、一八八—二〇九頁。
(16) 梶川信行『万葉集と新羅』前掲書、二〇六—二〇一頁。
(17)『続日本紀』は青木和夫、稲岡耕二、笹山晴生、白藤禮幸校注『新日本古典文学大系　続日本紀』東京：岩波書店、一九八九—一九九八年による。
(18) 沖森卓也など『藤氏家伝　鎌足・貞慧・武智麻呂伝　注釈と研究』東京：吉川弘文館、一九九九年。三六三頁。
(19) 王凱「日本古代大陸移民の「文学的」政治闘争—『万葉集』に基づく一考察—」『日語学習与研究』二〇一三年、第二号。
(20) 辰巳正明『懐風藻全注釈』前掲書、二七八頁。
(21) 沖森卓也など『藤氏家伝　鎌足・貞慧・武智麻呂伝　注釈と研究』前掲書、三六三頁。
(22) 森博達『日本書紀の謎を解く』東京：中央公論新社、一九九九年、二一六—二一八頁。
(23) 辰巳正明『懐風藻全注釈』前掲書、二五三頁。
(24) 与謝野寛『覆刻　日本古典全集　懐風藻　凌雲集　文華秀麗集　経国集　本朝麗藻（オンデマンド版）』東京：現代思想新社、二〇〇七年、一八六—一八七頁。
(25) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究　考証篇　第二』東京：吉川弘文館、一九八二年、三一頁。
(26) 沖森卓也など『藤氏家伝　鎌足・貞慧・武智麻呂伝　注釈と研究』前掲書、三六三頁。
(27) 黒板勝美『新訂増補国史大系第三巻　日本後紀・続日本後紀・文徳天皇実録』東京：吉川弘文館、一九三四年、二一—二二頁。
(28) 辰巳正明『懐風藻全注釈』前掲書、三五三頁。
(29) 梶川信行『万葉集と新羅』前掲書。梶川信行「東アジアの中の『万葉集』——旅人周辺の百済系の人々を中心に」『國語と國文學』東京：明治書院二〇〇九年四月。
(30) 王凱「大陸移民と万葉古歌」『外国問題研究』二〇一二年第四号三七—四二頁。
(31) 与謝野寛『覆刻　日本古典全集　懐風藻　凌雲集　文華秀麗集　経国集　本朝麗藻（オンデマンド版）』前掲書、一九一—一九三頁。
(32) 辰巳正明『懐風藻全注釈』前掲書、五〇五頁。
(33) 沖森卓也など『藤氏家伝　鎌足・貞慧・武智麻呂伝　注釈と研究』前掲書、三六三頁。
(34) 吉井巌『萬葉集全注　巻第六』東京：有斐閣、一九八四年、二〇三頁。
(35) 直木孝次郎『難波宮と難波津の研究』東京：吉川弘文館、一九九四年、一三八頁。
(36) 加藤謙吉『大和政権とフミヒト制』東京：吉川弘文館、二〇〇二年、三五四頁。
(37) 井上光貞「王仁の後裔氏族と其の仏教」。『史学雑誌　第五四編第九号』、一九四三年。九—一四頁。
(38) 王凱「日本古代大陸移民文学与古代王権——以難波津之歌為中心——」『日語学習与研究』二〇一〇年第五号、一一七—一二三頁。
(39) 黄暉：『新編諸子集成　論衡校釈』北京：中華書局、一九九〇年、五四五頁。
(40) 上田正昭『渡来の古代史　国のかたちをつくったのは誰か』東京：角川学芸出版社、二〇一三年。一四—一六頁。
(41) 韓昇：『日本古代的大陸移民研究』、台湾：文津出版社、一九九五年、五—九頁。
(42) 李卓「古代大陸移民在日本」『歴史教学』一九八四第九号、三〇—三五頁、中国中日関係史研究会編『日本の中国移民』北京：三聯書店、一九八七年、王勇編『中国南：尋繹日本文化的源流』北京：当代中国出版社、一九九六年等。
(43) 鈴木靖民『日本の古代国家形成と東アジア』東京：吉川弘文館。二〇

一一年：辰巳正明『万葉集と中国文学』東京：笠間書院、一九八七年
『万葉集と中国文学　第二』東京：笠間書院。一九九三等。